

進学先

和歌山県立医科大学 医学部

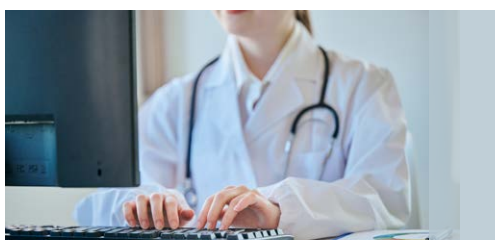
谷野 優希さん

桐蔭高校（桐蔭中学）

バレーボール部

医学部を目指そうと考え始めたきっかけや時期を教えてください。

谷野： お医者さんになりたいと思ったのは中1のときです。興味をもったきっかけはテレビドラマを見て「カッコいいな」って思って。そこから、実際にお医者さんから話を聞く機会があったり、大学のオープンキャンパスや医師体験に参加したり。中学生のときには、桐蔭高校から和医大に進学した先輩に話を聞かせてもらったりもしました。それで、医師になりたいという気持ちがだんだん大きくなりました。考え方が合っているか分からないですけど、医学部って「医師育成のための専門的な学校」みたいな感じなのかなって思っていて。だから、お医者さんになれるのだったら、どこの大学でもいいかなって考えていました。高校で模試とかで志望校を書くときは、とりあえず何校か書いて。高3になっても志望校ははっきりとは決まっていなかったんですけど、最終和医大になりました。将来は、和歌山に貢献して、ちゃんと患者さんの話も聞いて病気だけじゃなくて患者さんの背景までもしっかり診ることのできる医師になりたいなと思っています。



部活と勉強の両立についてはどのようなことを意識していましたか。

谷野： 高1の初めから、志望校ははっきりしていなくても推薦のことも考えて学校の成績を取っておこうと思っていました。実際に推薦を受けるかどうかはわからないけど、チャンスが増えるならと思って。和医大の推薦も考えてはいました。バレーボール部に入部したのは高1の12月で、受験勉強っていうのを意識したのは高2の冬くらい。先輩たちがちょうど受験・共テとかそういうときに、アカデミーのガイダンス(12月実施 新高3生ガイダンス)や学校の先生の話とかを聞いて「やらないと！」と思って。部活のあとにちょくちょくアカデミーの自習室に行くようにしました。特に高2の後半になると練習試合が土日に入ることも多かったんですけど、終わってからもできるだけ自習に行くようにしていました。自分の中では、部活の時間と勉強の時間はちゃんと切り替えないと決めていたんですけど、一人だとなかなかできなかったから、友だちと一緒にアカデミーの自習室に通うようにしました。その友だちが行くから自分も絶対行かないって追い込んでいた感じです。



受験勉強で意識していたことは？

谷野： 「何分やって何分休憩」みたいな感じがいいっていう話もよく聞くとと思うんですけど、逆に自分は休憩してその時間にスマホを触ったりしたらもう止まらなくなっちゃうので、集中力の持つ限りやるようにしていました。昼ご飯とか夜ご飯とかのときだけ休憩するみたいな感じで。途中でちょっとぼーとしちゃうときもあったんですけど、あまり休憩時間にもスマホを触ったり喋ったりとかはしていなかったです。あと、自分は勉強の計画をしっかりとがつり立てたい派でした。前もってその日の予定を加味して、この日は疲れるだろうとか気分とかも考えて、そういう日はあまり重めなものをやらないとかを事前に決めて。学校が早く終わる日なんかは、がつり勉強するとか。そういうことを考えて計画を立てていました。

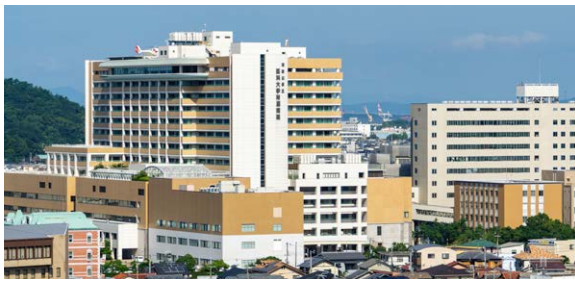
あと、スマホとの付き合いには本当に苦労しました。高3の夏休みになってもSNSや漫画を見たりしてけっこう夜中まで触って夜更かししてしまったり…。夜更かしした次の日はめっちゃ眠たくなるし、スマホを触ってしまったという後悔でめっちゃ泣いちゃったり。そういうこともありました(笑)。スマホは夜更かししてまで触らないことが一番だと思います。でも勉強中に調べ物もしたくなるからやっぱり手もとに置いておきたいし、連絡が取れなくなるから完全に離れることはできなかったです。自分が最終的にいいなと思った方法は、スクリーンタイムでこのアプリは何分って決めることです。調べ

物でもGoogleで調べちゃったらその流れで漫画も見れちゃうので、アプリは30分・40分とか、これくらいなら調べ物に使うかなくらいの時間に設定して。あとは朝の何時から夜の何時までしか使えないっていう設定にして、その設定用のパスワードは目をつぶって打って決めるっていうやり方(笑)。パスワードとかは親に設定してもらうこともできたんだろうけど、それは親に管理されているみたいで嫌だなと思って。だからもう誰も設定を変えられないような状態にして(笑)。背水の陣でしたね。実際は、解除しようと思ったらメールアドレス入れたらできるんですけど。文化祭のこととかで頻繁に連絡をとらないといけない時は解除しましたが、できるだけしないようにしていました。周りには、友だち同士でパスワードを設定し合ったりロックボックスに入れて見るのができないような状況にしたり、チートデイを作ってその日以外は電源OFFにしている友だちもいました。勉強時間については、高3の夏休みは12時間ぐらいやりたいなと思っていたんですけど、文化祭準備とかいろいろあったので10時間もいかなかった日の方が多かったです。冬休みとか共テ直前は、最高13時間勉強した日もけっこうありました。二次対策だったら難しい問題を時間をかけて解かないといけないけど、共テ対策だったら制限時間があるので分からない問題は飛ばして終わったらとりあえず一回答え合わせっていう流れで区切りをつけてサクサク進めることができたので、自分的には取り組みやすかったです。だから1日に6教科くらいやっていました。



Academy Campusのことについて教えてください。

谷野： 小学生の時にGES(小学生部:県立中学受験専門クラス)に入塾して、中学(中学生部:桐蔭中学完全専門クラス)も続けて、高校でもアカデミーに通いました。友だちもいっぱいいたので。特に印象に残ってるのが、数学の授業と共テの国語の授業です。数学は3年間今村先生(ACクラスライブ授業:高1ハイレベル数学、高2ハイレベル数学、難関大二次対策数学)でした。厳しいなって思うこともあったんですけど、ちゃんと自分たちのこと考えて言ってくれてるし、授業に行くと「ヤバい、やらないと！」っていう気持ちにもなりました。数学だけでなく、メンタルの方もけっこう鍛えてもらったと思います(笑)。



国語は、高1のときに古文・漢文の文法は自分でもやっていたんですけど、結局全部定期テストのためみたいな勉強しかしていなくて忘れてしまっていて。高2から長沼先生の授業(ACクラスライブ授業:高2受験国語・高3共通テスト攻略国語)を受けて高2のうちに古典文法を取り戻せたのは大きかったです。先生がイラストを書いて分かりやすく教えてくださってたので、ずっと頭に入ってきました。サテライン(代ゼミサテライン講座)は、為近先生の物理(為近和彦 講師(標準物理①②))がめっちゃためになったと思います。学校の物理の授業に全然ついていけなかったのが、初めは教科書レベルの授業から。為近先生は、公式の成り立ちや歴史上の人物なども引っ張り出してきてくれて、公式ができた裏話や背景をストーリー立てて教えてくれたのがすごくおもしろかったし、それのおかげでちゃんと覚えられました。あと、EQ(英語基礎カトレーニング講座(English Quest):テストに合格するまで帰れないAC伝統講座)。推薦入試用にイディオムの穴埋め問題の対策をしていたら「あ、これEQでやったやつ」という感じの問題がけっこうあって。EQを受けていたので、イディオムの対策が苦じゃなかったです。共テリハ(12月末の二日間、共通テスト当日と同じ時間配分・会場の雰囲気ですべて共通テスト本番を体感するAC特別講座)では本番みたいに練習できたので、実際の本番も焦らず「あ、そうそう、こんな感じ」みたいに落ち着いて受けられました。

インタビューを終えて

谷野さんは、もともと水泳部でマネージャーとして選手を支える立場にいましたが、「自分もプレイヤーとして挑戦したい」という思いを胸に、バレー部への転部という新たな一歩を踏み出しました。支える側から自らがプレーする側へと立場を変えることは決して容易ではありませんが、その挑戦を選び取った姿勢がとても印象的でした。順調に見える中でも、肩を痛め思うように練習ができない時期があり、悩みやもどかしさを抱えることもあったと思います。それでも、その時間を前向きに受け止め、自分にできることに丁寧に向き合い続けたことが、後の成長につながったのだと思います。また、高校2年生のときには、ACを卒業し自治医科大学へ進学した先輩と話す機会がありました。実際に目標を実現した先輩の言葉に触れたことで、進路への意識がより具体的になり、

私の中でアカデミーは、一番落ち着くことができて、一番集中して勉強できる場所だったなと思います。途中、他の塾にも行っていたことがあったんですけど、周りが知らない人ばかりだったのもあってすごくしんどくて。でもアカデミーで勉強をしてたら周りもみんな知ってる人だし、みんなが頑張っているから自分も頑張ろうと思えました。すごく集中して勉強ができたなって思います。



後輩へのメッセージをお願いします。

谷野： 受験は一人じゃないっていうの言いたいです。勉強をしたくないときとか、めっちゃ嫌・しんどい・辛いって思うときも、自分は絶対に学校とかアカデミーに行くようにしていました。行ったら絶対に誰かが勉強をしているから、その姿を見て自分も頑張ろうと思える。逆に友だちがしんどそうなときは自分が友だちを元気づけられる存在であってほしいなと思います。



自分の未来を真剣に描くきっかけとなりました。部活動と勉強の両立では、限られた時間をどう使うかを工夫しながら、自分に合った学習スタイルを確立していきました。思うようにいかない時期があっても、その中でできることを大切に、一歩ずつ前へ進んでいった姿勢こそが、今回の合格につながったのだと思います。合格おめでとうございます。中学1年生の頃から抱き続けてきた「医師」という目標へ、いよいよ第一歩を踏み出します。患者さんに寄り添い、心を支えられる医師へと成長してってください。これからの活躍を心から応援しています。

AC県庁前校カウンセリングスタッフ 赤井 栄木